

# 読書メモ2018年5月号

—本多静六『私の生活流儀』（実業之日本社・2005年）ほか—

やなぎさわかつひろ  
柳沢克央 編

（信州・上田仮説サークル）

2018年5月19日（土），5月例会用レポート

## ◇はじめに—青森に行って萌出浩さんに会ってきました

前回までの「読書メモ」と同様，サークルで発表することを目的とすると，読書がはかどるので，今回もこのメモを作成しました。自身のため，記録を残すことが第一目的です。みなさま，よろしく（適当に）おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり，引用あり，要約あり，感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。（私物）と書き添えてあるもの以外はすべて篠ノ井高校および屋代高校図書室蔵書。

4月末に青森の萌出浩さんを訪問してきました。サークルで詳しい報告ができると思います。やはり，すぐれた実践をしている人に会って話をするというのはいいものです。出口治明氏（立命館 APU 学長）の言っている「人・本・旅」の素晴らしさを実感してきました。このことを元に，いま考えていることを具体的な形にまとめていくつもりです。

萌出さんに教えてもらって，4月からフェイスブックを始めました。フェイスブックがコミュニケーションの（そして，たぶん研究についても）質と量を変えることを実感して，とても驚きました。これからますます活用していきます。

屋代高校でも，授業の手応えを十分に感じています。《自由電子が見えたなら》（簡略版）で，自由で和やかな仮説実験授業独特の雰囲気を楽しんでいます。フェイスブックとサークル掲示板に感想文の一部をアップしました。すぐに反応があり，とても励みになっています。

## ◇4月号で読んだ本

◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・1』（黎明編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）

- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・2』（未来編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・2』（未来編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・3』（ヤマト編・宇宙編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・4』（鳳凰編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・5』（復活編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・6』（望郷編）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・7』（乱世編・上）（朝日ソノラマコミックス・1997年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・8』（乱世編・下／羽衣編）（朝日ソノラマコミックス・1998年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・9』（異形編・生命編）（朝日ソノラマコミックス・1998年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・10』（太陽編・上）（朝日ソノラマコミックス・1998年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・11』（太陽編・下）（朝日ソノラマコミックス・1998年）
- ◎手塚治虫作・漫画『火の鳥・別巻』（ギリシャ・ローマ編）（朝日ソノラマコミックス・1998年）
- ◎宮崎駿作『風の谷のナウシカ』（第1巻～第7巻）（徳間書店・1997年）
- ◎チャップリン著『チャップリン自伝／上（若き日々）・下（栄光と波瀾の日々）』（新潮文庫・2017年）
- ◎小林秀雄・岡潔共著『人間の建設』（新潮文庫・2010年）
- ◎バロン吉元作『マンガ日本の古典・徒然草』（中央公論社・1996年）
- ◎後藤秀機著『天才と異才の日本科学史』（ミネルヴァ書房・2013年）
- ◎川合康三著『生と死の言葉』（岩波新書・2017年）
- ◎日本写真家協会編『SNS時代の写真ルールとマナー』（朝日新書・2016年）
- ◎永六輔著『職人』（岩波新書・1996年）（私物）
- ◎永六輔著『大往生』（岩波新書・1994年）（私物）
- ◎茂木健一郎著『脳リミットのはずし方』（河出書房新社・2018年）（私物）

#### ◇今回、読んだ本

- ◎本多静六著『私の生活流儀〈新装版〉』（実業之日本社・2005年）（オリジナルは1951年刊）（私物）

著者の業績そのものの防雪林を青森で萌出浩さんに紹介してもらった。それはそれは素晴らしい森林だった。本多氏の著書は検索によって知り、アマゾンで注文して手に入った。このような良書が安価で手に入るのはとても幸せなことだと思う。

素晴らしいと思った部分を抜き書きする。

○自分の生命は親の生命のうけつぎである。親の生命は遠い祖先からのうけつぎである。

われわれの肉体はその生命のいれものであって、一代かぎりでは死滅のほかはない。しかし、その中に存する生命は永劫不滅である。すなわち、われわれの肉体は死ぬことになっても、その生命は生殖細胞によって直接子孫に遺伝し、その精神はさらに言語・文章・事績等によって広く万人の精神界に生きるに至るものである。

宇宙の大生命から派生せられた人生は、もと電子という一元であるが、前にも述べたように、その表現は精神界（霊）と物質界（肉）の二方面となる。富めるも、貴きも、美しきも、その他もろもろも、おしなべてことごとく、やがては墓にかえる。物質界の法相はつねに諸行無常である。しかし、これを精神界からみるときは、われわれの生命は永劫に生き、永世無限に栄えることが信じられる。

人間の生命は欲望充実の一生である。霊肉不二の生命をのぼしつつ、しかも、あるいは物質界に欲望し、あるいは精神界に欲望する。この両方面の欲望を調和し、純化し、真善美の理念生活に入るのがわれわれの修養であり、自己錬成である。しかも、物質界にはしばしば不如意のことも多いが、精神界はつねに容易に意のごとくなるものだ。したがって、人はたえず精神の力で物質界を支配し、外界から来る不如意を、内面的な努力精進によってこれを如意に転換しなければならぬのである。

いわゆる神仏は決して外にあるのではない。みなわが身の中にあるのだ。人は神仏の理想に近づこうと常につとめつつあるのであるが、外界に対する本能欲の誘惑により、ややともすれば、過失墮落に陥りやすい。しかし、これも人間本来の自然の姿であって、過失をおかすともあえて悲観絶望することはない。さらに大いなる勇猛心をふるいおこして、改過遷善（かいかせんぜん）、本来の理想に向かって突進すべきである。

どんな小さな理想（一步前進）でもよろしい。それが一たび実現すれば、もはやそれはその人の人生の現実となる。しかも、その現実を土台として第二のより高き理想が現れてくる。理想追求は人間の本性であって、そこに「人生即努力」の絶えざる精進が生まれてくるのである。そうしてまた、そこに「努力即幸福」の新人生観が生まれてくるのである。（74 ペ）

○自分の仕事は自分で、しかも、できるだけ先へ先へと早めに片付けていく。これが日常生活における私のいちばん心がまえである。

きょうの仕事をきょう片付けるのは当然のことであるが、もしできることなら、明日の仕事をきょうに、明後日の仕事は明日にと、順次手回しよく片付けるようにしておきたい。ほんの少しずつでも、少しずつ早めに片付けるのと、少しずつ遅らせてしまうの

とでは、そこに大変なちがいが出てくる。こうした心ぐみで、なんでもいったん取り掛かった仕事を、つぎつぎに追い込んでかかれば、どんな事故が不意に起きててもまごつくことがない。いや、その事故さえも起きることが少なくなる。

きょうの仕事を明日へ繰り越すとすると、明日の仕事はまた明後日というわけで、仕事が溜まり溜まってついに動きがとれなくなる。毎日毎日仕事の仕残りが気にかかって、家へ帰ってもじゅうぶん休養がとれず、夜も安眠ができなくなる。したがって、日曜にも臨時出勤しなければならず、過労に過労が累加されてきてしまう。

これは仕事のことばかりではない。なんでも早目ということの好きな私は、汽車旅行の場合などでも、支度のでき次第、早目に停車場へ出掛けていく。そうして、時間があればそこで本を読むなり、何か調べものをやる。この方が時間ギリギリまでうちで仕事にかじりついているよりも、落ちついて、かえって能率が上がる。本を読んだり調べものができなければ、居眠りでもして、その晩の睡眠の前払いをしておく。もしまた、予定よりも前発の汽車に間に合えば、それに乗ることにする。こうすれば、時間にも余裕ができ、途中で故障が起きてても大丈夫だと、心にもゆとりが生ずる。

急いては事を仕損ずるといえるが、急いてしなくともすむ仕事を、ゆっくり、先へ先へと手際よく片付けておけば、やがて急く必要もなければ、急いて事を仕損ずることもない。先へ先へと片付けた仕事には、いかなる場合にもほとんど手落ちというものがない。

仕事の大きな手落ちは、あわてて片付けようとする際にのみ起きるようだ。(81 ペ)

(柳沢注：はたして、下線のように断言してもいいものだろうか。しかし、同時に断言するところに本書の魅力があると思う)

○要するに、株式投資の秘訣は、いずれも自己資金をできるだけ用意(貯金または利殖)して、その限度内で、割安に買い、割高に売ることだ。だれにでもわかり切ったことで別に奇も変哲もない。平々凡々を極めたことである。

それなのに、どうしてこれに失敗するものが多いか。儲けるものが少なくて、損をするものばかりが多いのか。それはあまりにも株屋のいいなりに動いて一株屋は商売だから無責任に動かしたがる—しっかりして自主的に動かないからである。つまり俺の流儀という流儀を確固たる自信の上に押し通さないからである。私が冒頭において述べた、「ムリをしないで最善をつくす、そうして、辛抱強く時節到来を待つこと」というのは、すなわち、このことであって、しっかりした合理的な自分の流儀を立て、どんなことがあっても、その流儀から逸脱しないで節操をもつことが、株式に限らず、すべて巧みな

る投資に成功するゆえんである。(209 ペ)

\*

時代の変遷を経ても全く古さを感じさせない、素晴らしい本である。それは本多静六氏の手になる防雪林のように、物言わず、堂々と現代でも生きて人のためになる、尊敬すべき生き方そのものだ。

### ◎福原義春著『生きることは学ぶこと』(ひらく・1997年)

印象深い部分を抜き書きする。

○私の体験から言えることですが、習いごとは不思議に、はっきりした目的意識を持ってやると、かえって役に立たないものです。これがなぜなのかは、よく判りません。ちょっと考えれば、目的を持ったほうが効率的なように思えますが、そうではないのです。やはり最初から一定の目的に縛られると、のびのびとした自由な発想や着眼がなくなるということなのでしょう。

学ぶということは、まず知るということです。自分がいままで知らなかったことを知るといことは、それ自体が人間にとって大きな驚きであり、大きな喜びなのです。(26 ペ)

○経験知(仕事を通じて培われる)、暗黙知(阿吽の呼吸で物事がスムーズに運ぶ)、普遍知(ものごとの本質を見きわめようとする知)の組み合わせが大切。(100 ペ)

○関係論という意味で、ヒンズー教は、じつに簡にして要を得た教えをしてくれています。すべてのものごとは、三つの原理の上にしか成り立っていないというのです。ひとつは、人と神との関係、ひとつは、人と人との関係、もうひとつは人と自然との関係です。人と自然が対立する関係としてとらえる西欧哲学とは、まったく異なった考え方です。(108 ペ)

○住友生命の上山保彦社長(当時)は、リーダーシップの定義は、人の力を引き出すことを決断することだと言われています。ハーマン・ミラーの会長だったマックス・デュプリーは、事実を掌握し、奉仕し、最後にできあがったことに対して、「ありがとうございます」と感謝することがリーダーシップだと言います。このお二人の話を考えてみても、命令や支配のリーダーシップの時代は終わったと言えるでしょう。

社長や部長，課長というのは地位ではなく，職能です。つまり，上司も部下も同じ人間ですから，命令で動かすのではなく，対等の立場に立って，チームとしてひとつのプロジェクトに当たり，完成していかなければならないということです。(110 ペ)

○結局，日本は森有礼大臣の考え方を主流にしてやってきました。さらに戦後は，アメリカによる教育制度の改革によって，現在に至っています。このやり方は，発展のある時期には一定の成果があったらと思います。しかし，いまの学校の状況や受験体制，そして何よりも子どもたちの様子を見てみると，もはやこの教育システムは破綻し，これから先は根本的に考え直さなければ，大変なことになるような気がしてなりません。福沢諭吉先生の「発育」という思想を，いまこそもう一度，日本の国民すべてが，よく考えてみる必要があるのではないのでしょうか。(130 ペ)

○自分のゴールを自分で決められるかどうか，また自発的な動機で自らの目標を立て，それを達成できるかどうか。その達成感に，心からの喜びを感じられるかどうか。そう自問自答しながら，いままでやってきました。(174 ペ)

○大きな仕事をするために，いったいどうしたらいいか。私は，次の四つを挙げることにしています。

- (1) 社内外にコミュニケーションネットワークを持つ。
- (2) 仕事はすぐに取り組む習慣を身につける。
- (3) 仕事以外のところで勉強を続ける。
- (4) 自分に投資し，一流の人と，文化，芸術にふれる。(181 ペ)

\*

なぜか，本多静六氏の著書と共通の考え方を感じた。こうしたことに興味を持っているということだろう。どのように仕事を進めたらうまくいくか，どのようにしたらよい人生になるかということについて，こうした先人の考えを学ぶ（真似をする）ことは重要だと思った。

#### ◇次回以降の予告

◎島地勝彦著『神々にえこひいきされた男たち』（講談社＋α文庫・2017年）（私物）

◎左巻健男他著『理科の実験安全マニュアル』（東京書籍・2003年）

- ◎森田敦史著『なにもしていないのに調子がいい』（クロスメディア・パブリッシング・2016年）（私物）
- ◎板倉聖宣著『増補版・模倣と創造』（仮説社・1987年）（私物）
- ◎八代目桂文楽著『芸談あばからべっそん』（ちくま文庫・1992年）（私物）
- ◎マックス・ウェーバー著・中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（日経BPクラシックス・2010年）（私物）
- ◎牧野雅彦著『新書で名著をモノにする「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」』（光文社新書・2011年）（私物）
- ◎廣松渉・加藤尚武編訳『ヘーゲル・セレクション』（平凡社ライブラリー・2017年）（私物）
- ◎西鋭夫著『國破れてマッカーサー』（中公文庫・2005年）（私物）
- ◎文藝別冊『KAWADE 夢ムック・立川談志』（河出書房新社・2013年）（私物）
- ◎立川談志著『努力とは馬鹿に恵えた夢である』（新潮社・2014年）（私物）

#### ◇まとめ・つぶやきなど

○会議室の前に生徒がいて、「何時に職員会議が終わりますか」と訊かれて、返答に困った。単純だが難度が高い質問だ。そのときは「ごめん、わからないな〜」と答えたが、後で考えてみると、「17:00までに終わる確率が10%、17:00~17:30が40%、17:30~18:00が40%...」とでも答えておけば、互いに納得できてホッとすることができるはずだ。こんど訊かれたら、こう答えてみることにする。

○ドライブレコーダーは「離見の見」だ。

○主権在民が判っている国民。主権が生徒にあるということが判っている生徒たち・保護者。このことは「相似」の関係にあるのではないか。つまり、学校は社会の縮図ということだ。

○国や行政機関がやるべきなのは自らの「働き方改革」（変な言葉だが…）だ。「働き方改革」をするのは誰かといえば、自分自身だ。気がついた者から、ひそかに、勝手に変えればいい。自分の身を守るのは自分自身だ。勘がいい人は毎日、働き方を改善していることだろう。改革というほど大げさに考えなくてもいい…と考えるのは自由だ。

○「日本三大ほら吹き」の人物は、孫正義氏（ソフトバンク）、柳井氏（ユニクロ）、稲森氏（日本電産）の三人のことなのだそう。いずれも日本経済界で名だたる人物だ。ただのほら吹きではないだろう。この話はトレーニングジムでよく顔を合わせる武井氏

(仮名) からきいた。

○なぜ指導案を書くのか。授業を掌握するため。時間・空間・求める認識の変化を掌中に収めて事に臨むため。これは「メタ認知」を高めることそのものではないだろうか。

○入学式は生徒をホールピペットで吸い取る作業。卒業式はビュレットで滴下する作業に喩えられる。

○「試験に受かると希望が実現する」のではなく、「希望を実現する者は試験に受かる」のである。ホテル王といわれたヒルトンの言葉「ベルボーイがホテル王になったのではなく、ホテル王がベルボーイから始めたのだ」にインスパイアされて。

[以上、2018年5月19日(土) 17:30]

